

(1998. 6～発行)

# 県連速報 NO. 158

(栃木県生協連・速報)

発行責任者 会長 竹内明子

編集責任者 専務 鎌柄克美

2011年9月20日(火)

## 9月17日いわき市へのボランティア活動への参加第9次

9月17日(土)いわき市(平)復興支援ボランティアセンターに、栃木県生協連(企画第9次)で5名の方がボランティア活動に参加しました。

(6時00分頃とちぎコープおもちゃのまち店と西那須野センターの駐車場に2名と3名が集合し出発、車2台に分乗し北関東道と東北道経由でいわき市へ。5名のボランティア先は、原発から約25Km南のいわき市久之浜未続でした。)

以下、とちぎコープ西那須野センターの手塚さんに感想文をいただきました。

### とちぎコープ 西那須野センター 手塚 誠

9月17日(土曜日)、とちぎコープとして第9回目となるボランティア活動に初参加させて頂きました。場所は福島県いわき市、とちぎコープからの参加者は5名でした。日本の歴史に残る大災害を決して忘れないためにも、ぜひ被災地を直接支援したいと思っていました。

朝6時に西那須野センターを乗り合わせで出発し、およそ二時間で現地入りしました。途中の高速道路は既に補修済みでしたが、所々波うったままでした。知らずに夜間運転していたら危険を伴う状態です。

いわき市社会福祉協議会がボランティアセンターとなっており、ここで支援ニーズのマッチングを行いました。我々を含む約30名は、バスで乗り合わせて海に近い道路の側溝の土砂を取り除きに行きました。

支援場所に行く道中は、瓦礫の撤去はあらかじめ終了しているので何事もなかったかのような街並みが続きます。しかし、そこに突然倒壊したままの民家が姿を現します。二階の壁まで崩れている家を見ると、あそこまで津波が襲ったんだ…と、恐怖を感じました。

バスの車内では隣り合った者同士で会話が生まれます。

「よく見かけますが一緒のグループになったのは初めてですね」「私は千葉からきました、実家がこの四倉なんですよ。テレビであの店に船が突き刺さって

るのを見て「ダメだ、みんな死んだ」と覚悟しました。お陰様で全員無事でしたが。」震災後半年経ってもボランティアを続ける人達にはやはり事情がある方が多いようです。

現地では側溝に詰まった瓦礫や土砂をスコップでさらいました。重機でできる事には限界があり、やはり細かい作業は人の手に頼らざるをえないのですね。水を含んだ泥は重く、適度に休憩を入れながらの作業が続きます。

休憩時間にかつて民家があったであろう場所を歩いてみました。落ちている目覚まし時計の針が3時39分で止まっていました。まさにこの時、ここを津波が襲い、普段の生活が止まってしまったのですね。切なくなります。

側溝はみるみるうちに綺麗になっていきました。見知らぬ同士でせーの、と声を掛け合い、自ら進んで交代を申し出る。これこそ、きちんと目的があって集まっている30人の為せる技、と感じました。

締めの挨拶で区長さんからお話をいただきました。この側溝を使っている家のおじいさんが、家族と二人で土砂すくいをしていて、熱射病で倒れてしまったそうです。作業してみて、当事者だけでは現状復帰は難しいと感じました。

一日かけて出来た事は、わずか数十メートルの側溝を片付けただけでした。しかし、事前にボランティア参加者の報告を聞いていたため、スコップのひとすくづつが、確かに被災地の役に立っていると確信を持って今回の支援に臨めました。

今日の成果はわずかでも、人の善意が絶えぬ限り、共に復興する日が必ず来る。そう信じます。

(左からとちぎコープ  
西那須野センター  
西野さん、高濱さん、  
手塚さん、県連鎌柄、  
越戸店久保田さん)



## 9月20日 10時～「ふれあいお茶会」が開催されました。

栃木県生協連・社会福祉法人ふれあいコープ・NPO ウィズの三者の主催ととちぎNPO 支援センターぽ・ぽ・らの共催で、福島県から避難されている方々に、宇都宮の特養みどりの地域交流室で、「ふれあいお茶会」が10時～12時に開催されました。天候不順な中でも、6名の方が参加されました。今回スタッフは、とちぎコープの理事さん中心に対応されました。

また、ぽ・ぽ・らやうつのみやサポセンの協力、下野新聞の取材もありました。今後も第3火曜日に「ふれあいお茶会」を継続していく予定です。

17日、20日と皆さんお疲れ様でした。